

---

# **?二百文字?も積もれば塵となる**

T A M A K I

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

？二百文字？も積もれば塵となる

### 【Nコード】

N3421K

### 【作者名】

TAMAKI

### 【あらすじ】

【ジャスト200文字の連作】になります。しかし内容は一話一話独立していますので、お気軽にどうぞ！ちなみに六話【斧】ならびに二十三話【五人の女】におきまして、画期的な？試みを実施しております（笑）。

## ふたり

「これ、なあに？」

相手が触れてくる。

「左の目」

「これは？」

「右。でも要らない」

「なぜ？」

「だって、涙も枯れたもん」

「これは？」

「鼻も要らない。匂いを嗅ぐこともないし」

「これは？」

「口もね。もうキスできないから」

「これは？」

「耳も。声も聞けないから」

「全部必要なくなったのね？」

「うん。何もかも」

「じゃあ、いい？」

私は頷く。

「いいよ」

すぐに、相手の顔が苦痛で歪みだす。

同時に私の……

鏡の中の私の顔も……

## 電話

ある夜、覚えのない番号から着信。  
女が、

「彼と結婚しないで」  
そう告げると、名乗らないまま切った。

やがて、その番号が私の友人・恵子のものであることがわかった。

彼と恵子が私の知らないところで？

彼は否定したが、結局、私と彼は別れてしまった。

数日後、恵子が私に会いにきた。目を輝かせ、弾んだ声で、  
「彼と別れたのね。よかった。もう、どこにも行かないで」

あの電話の意味も、恵子が誰を好きなのかも……やっとわかった。

## 刑事

「長さん、殺しです！ 場所は……えっ？」

部下の刑事が驚くのも当然だ。

常に、女性に有利な捜査をするので有名な？長さん？。今回、何と自宅で殺人事件が起きたのである。

被害者は祖父。家族構成は他に、祖母・息子夫婦・大学生と高校生  
の孫娘二人。

第三者の立場で冷静に捜査を進める？長さん？は、やがて犯人を  
指摘した。無論、自身のポリシーに従って、だ。

そこには、亭主に手錠をかける、涙に濡れた長島千鶴子刑事の姿  
があった。

## 顔

「浩君、今帰り？」

あ、近所のおばちゃんだ。

「うん……う、うわっ！ か、顔が！」

し、失敗した福笑い！ め、目がおでこに！  
一目散で走った。

今度は隣のおじちゃんが

「どうした？」

「……ど、どわっ！」

く、口がほっぺたに！

「マ、ママ！」

奥からママが

「何慌ててんの？」

「ぐ、ぐわっ！」

は、鼻が耳に！

「まさか？」

部屋に戻って、すぐに鏡を見た……

「ああ、よかった！ いつもどおりだ」

そこには、目や口や鼻なんてついちゃいない。

我慢できない

身体を滑らせ、ユキの薄桃色の乳房に手を伸ばす。  
ぎゅっと力任せに揉みしだき、ゆっくりと口を開く俺。  
喉をならし、狂ったように吸う。

「ねえ……おいしい？」

彼女の声に、目を閉じたまま、ゆっくりと頷く。

「うん、すごく」

すると今度は俺を覗き込み、急かすように甲高い声で、

「早く……」

と、哀願した。

「代わってよ、ペーター！ 早く私も飲みたい」

「わかったよー ハイジ」

「そうやって飲むユキちゃんのお乳は、最高だもん！」

## 斧

「よし、この辺だな」

不敵な笑みを浮かべた男が、サファイアの如き泉の前に立っている。

そして噂どおりに、手に持つ普通の斧を、その中心に向かって思いつきり投げ込んでみた。

「さて、さて」

だが少し経つても、お目当てのものが現れない。

「もう！」

その時、頭上で雁が鳴いた。

元々が猟師の男は、思わず天を仰ぐ。

やがて、再び泉に目を落としてきた彼。その目が大きく開かれた。

知らぬ間に、サファイアがルビーに変わっている



## 機転

「春になったら遊びに行こう!」

夫の言葉に喜んだ妻。

だが四月になった途端に、早速釣へと出かけている。

「ただいま!」

一応は新婚だ。

「ね、私と釣とどっちが大事?」

「釣! 面白いし」

「が、がーん」

よろけながらも、妻はクーラーボックスを指差し

「そ、それとは?」

「鮎! 旨いし」

「うつつ、チ、チンケな魚にまで」

「泣くなよ。今日は何の日だ?」

「えっ?」

「君が一番大事に決まってるじゃないか!」

巧みに話がすり替えられた。

近頃の……

近頃の若い子たちときたら、ほんと、なってない。

みんなだらしないし、わがままだし。

大人の言うこと聞かないし、やりたい放題だし、全くけしからん。私たちの頃は、みんなもう少し分別もあったし、常識とか、礼儀とか、ちゃん

とわきまえてたと思うけど？

あーやだよだ。なんとかしてほしいわあ、全く……

「……みたいなことが、書いてあったんだって」

「書いてたって、どこに？」

「古代エジプトの、ピラミッドの碑文に」

「……」

## 花占い

「好き、嫌い、好き……」

乙女が白い花を手をしている。

「……好き、き……くっ」

運悪く偶数だった。それを投げ捨ててしまった。

次は赤い花。

「……好き、き……んもー！」

重ねて偶数だった。それも足で踏まれた。

賢い娘、ニヤリとしながら黄色の花に手を。

「嫌い、好き……」

やがて

「……好き、き……くっそー！」

何故か今度は奇数だ。

鬼のように花をむしりまくった運の欠片もない娘。

「もう手痛いし」

それもそのはず、植物園だ。

I s h i

「？造影ＣＴ検査？なら原因を突き止めれますが」

医師が言う。

「が？」

「稀に気分が悪くなったり、血圧が下がったり……重度になるのも  
0.04%は」

「そ、そうですね」

「でも、普通のＣＴ検査だと病気を見落とす恐れがあります。責任  
は取れません」

医師が寄ってきた。

「どちらにされます？」

「一万人中四人、案外多い。」

彼の意味は

「普通で」

「原因がわかりました」

石だった。

「よかったー」

だが、別の病魔も秘かに進行していた

すき

「ネエ、私のことすき？」

いちいちウザイ女だ。

「もちろん、すきだよ」

「どれくらい、すき？」

二者択一ならば、嫌いだ。

「地球で一番だよ」

「私も貴方のこと、だーいすき！」

恩着せがましいなあ、つたく！

「嬉しいな」

「じゃあ、浮気したらダメだよ！」

いつオマエの物になったんだ？ ざけんな！

「しない、しない」

「もうね、すきすきすきすき……すきだらけ！」

「そうだね、すきすきすきすき……」

その首を両手で絞る。

「隙だらけ」

## ジェシカ

ジェシカは死に物狂いで走り、車に飛び乗った。  
だが、なかなかエンジンがかからない。

「カモン……プリーズ……カモン！」

つぶやきが叫びに変わった瞬間、ドーンと激しい物音。  
フロントガラスに、もの凄い形相の男が張り付いている。

男の紅く大きな両目が、彼女を捕らえて離さない。

「キヤアアア！」

シートに背中を押し当て肩で息をする彼女に向って、男はゆっくりと唇を動かす。

「お客さん、御代まだだね？  
食い逃げする気？」

## 拉麵

客が食べ終わった丼を、毎日チェックする拉麵究極屋の主。最近、残されているスープの量に不満だ。

「飽きられたか？」

悩みが尽きぬ男は三日間だけ休業し、さらなる究極のスープを編み出すことにした。

四日後。お昼時も終え、丼を片付け始める店員に

「おい！ スープは？」

「全部飲まれていますよ！」

これに何度も頷く主。

「そうか。よし、よし」

洗い場に運ばれてきた丼たちを見て、思わず我が目を疑う主。

麵が八割がた残っている……

## 二百文字

「二百文字で何か書くって難しいよね？」

「まず、起承転結を考えるんだ」

「無理だよ、そんなの。短すぎるし」

「いや、最初は四百くらいで書くんだけ。目安として、起で百文字、承で百文字……こんな感じ」

「それならば何だかできそうな気も」

「それが完成したら、各部分を半分まで縮めるんだ」

「そっか！ だから、縮めたのを集めれば二百文字に収まるんだね？」

「そうそう。後はさ、微調整だね」

「文字数のね！」

「ホラ、二百だよ！」



## 会社とは

私が事務をしている会社のボスは、とにかく厳しいのです。  
ある日の事です。若い営業がボスに呼ばれました。

「黙っていないで、返事くらいしたらどうなんだ！」

「……はい」

「何？　口答えする気か！」

翌日、辞表が出ていました。

また、打ち上げでは

「今宵は無礼講だぞ！」

暫くして、顔を赤らめた社員が

「だ、第一、方針そのものがおかしい……」

それ以来、顔を見ていません。

一年経ちました。

また、夫婦だけの零細企業に戻りました。

所謂 誰もいなくなった

吹雪により、山荘に閉じ込められた三人。

この機会を待ってたかのように、各々が動き出す。

「晴山の奴め、こいつで」

化学専攻の三雲の手には、毒薬入りの瓶が。

一方、過激な晴山はというと

「この時限爆弾で、雨坂の野郎を」

また雨坂も、その知識により

「感電死もいいもんだぜ、三雲よ」

山荘内で燃え上がった三色の炎がまさにぶつからんとしている、その時だった。

その炎熱により誘発された雪崩が、唸りを上げつつ彼らを直撃した

## 所謂 吹雪の山荘

吹雪に閉ざされた山荘内。

一階の自室で、茜がナイフを手に

「チャーリーのヤツ、許さない」

隣の部屋では、緑がこれまたナイフに目をやり

「南條君……死んでね」

一方、二階では葵も

「このナイフで、進を！」

嘘のように、すっかり晴れ渡った翌日。

今、山荘に残されたのは、三ヶ所に刺し傷が残っている屍、ただ  
一体のみだった。

そしてその内ポケットからは、免許証が顔を覗かせている。

昭和62年〇月 日生、チャーリー〓南條〓進

## 本末転倒

密室内で床に倒れている一人の男。

その前で、二人の刑事が腕を組んだまま

「それにしても不思議な事件だな」

「ええ、デカ長。ドアに鍵もかかっていましたし、おまけに……」

「凶器も見当たらない」

「はい。さらに、このおびただしい血の量にしても……」

「相当恨まれていたな」

「そうですね。その上、部屋中……」

「そこらにある物全てをひっくり返したようだな」

「ん？ 今何か……」

「音が聞こえたような」

「は、早く、病院へ……」

主人公は……

どうしようかなあ。

二百文字小説、今日中に書かないと。

主人公は……うーん。

（そうだ！）

じゅげむじゅげむごころのすりきれ

かいじやりすいぎよのすいぎよまつらんまつふらんまつ  
くうねるところにすむところやぶらごうじのやぶごうじ

ばいばいばいぼのしゅーりんがん

しゅーりんがんのぐーりんだいくーりんだいの

ぼんぽこぴーのぼんぽこなーの

ちようきゅめいのちようすけ

は、旅に出ました。さようなら。

完（確信犯）

## 人斬り

俺は「人斬り・宇蔵」と怖れられている侍だ。  
狙った獲物は逃さない。

今夜は“越前屋の源右衛門”をやる。  
裏で汚いことばかりしている悪党だ。

暗い夜道。

奴を待ち伏せする。

ゆつくりとその前に立ちはだかり、

「源右衛門、観念しろ」

と言いながら、肩から腰にかけて、バツサリ一太刀。

仰向けに倒れ、虫の息の源右衛門。

苦しそうに顔を歪ませ、とぎれとぎれに言葉を吐く。

「ひ…人…」

「ああ、俺は宇蔵だ」

「人…人…」

人違い」

え？

## 愛、恋

「愛やら恋だのしたいなあ！　したいしたい！」

恋愛……オーソドックス。これが一番だね、やっぱ！

純愛……うんうん、いいないいな……でも、もう無理かなあ？

遠距離恋愛……うう、憧れる！　一週間に一度だけ彼に会う……も、萌え！

悲恋……案外自分が可愛く見えて、これもいいかも？

性愛……ぼづ。い、いやんだわ

「って結局は何でもいいんだ、愛恋ならば！」

さて、そんな私を待っていた愛恋って？

「おいこら！　また失恋かいっ！！」

## 占い婆さん

駅の片隅、二人の人物が向き合って座っている。

「おい、婆さん！ 三日後に死ぬだと？」

「ああ、そのように出たわい。それこそが、おまえさんの運命じゃ」

「ふ、ふざけんな！ こんなにピンピンしてる俺様が」

「自分でそう思うんなら、それで結構じゃわい。これ以上言わん」

「フン。どうせあんた、知れた占い師なんだろ？」

「そうかも知れん……じゃがな、今まで外れたことは一度もないぞ」

「ああ。あんた、今日デビューしたんだな？」



## 五人の女（上）

警部と警察医を現場で迎える、与田志保刑事 署内きつての凄腕である。

「こちらです」

やがて、死体を調べていた警察医が  
「警部。同一凶器による刺し傷が五ヶ所あり、まだ一時間は経っていないかと」

「他には？」

「ええ。その傷のどれもが角度、力加減ともまちまちですね」

翌日

「女たらしのガイシャの周辺にいた五人の女の内、すでに四人までが判明した……それで、このヤマをどう思うかね？」

早速、意見を求められた与田刑事だ。

## 五人の女（下）

「警部。私が思うに、恨み辛みの末かと」  
低い、落ち着いたトーンである。

「五つも残っていた傷のことか。だが私は、五人の女が共謀した、実はこう睨んでいる……各々が、一刺しずつしてな」

「考えも及びませんでした」

「ところで、昨日このヤマに関する電話は、君からの一本のみだった」

「そうですか。それにしましても、いきなりですね」

「では聞くが」

「何でしょうか？」

「君は如何にして、このヤマを知り得たのかね？ 与田君よ」

## 流行病（はやりやまい）

昔々、ある村にハッサンという少年がいた。

「ボク、ドラゴンに飲まれる夢見ちゃった」

「！」

父も母も声を失った。

それもそのはず、この夢を見た子供は三日以内に流行病にかかり幼き命を落とす　　こう、巷で言われているのだ。

祈祷師にですら、さじを投げられた夫婦。もはや神に祈るしかなかった。

## 四日目の朝

「おお！　病にかかってないぞ！」

このハッサン、日頃の過食および運動不足により、すでに体はオッサン化していたのだった。

## 名医 ハッサン

そのハッサン、今や真正正銘の、心身ともにオッサンである。だが侮ることなかれ、今や国一番の名医とまで崇められており、今日も訪れる患者が後を絶たない。

「先生、頭が痛くて」

彼はイスに座ったまま、男に近寄り

「どれどれ」

次の瞬間、男がもの凄い悲鳴を上げてきた。

「うおおおお！」

だがハッサンは澄ましたまま

「どうですか、頭の痛みは？」

「な、治りました！」

「では、お大事に」

部屋から出て行く男、足を引きずっている。

## 決闘

「ロシアンルーレットで決闘？」  
友人は目を丸くした。

「つ、つい……で、どうやったら勝てる？」

「銃の名前は？」

「サタン」

「そっくりな銃を一丁用意しろ。そして全弾をこめ、直前に上手くすりかえる」

「あ、ああ。でも順番が先になったら？」

「相手を撃つのみ、さ」

当日。

ラッキー！ 後順だ！

だが……

奴が握っているのは、似ているがサタンじゃない？

「ま、まさか、同じ事を？」

そう思った瞬間、奴は引き金を弾いた。

俺に向って。

## 脱出

「いいか、45号。この部屋から脱出できる方法が一つだけある。それを見つけれのかどうかは、お前さん次第だ。幸運を祈る」

敵国に捕らえられた45号　つまりスパイである俺様のことだ。脱出可能だつてさ。だがドアはもちろんのこと、床、壁、窓出口らしきものなんぞ、ありやしない。

唯一の方法？　はて？

悩みに悩んだ俺様、ようやく部屋から脱出することができ　そして今、上空にいる。　そ

唯一の方法　そう、昇天したのさ。

## 脱出（後書き）

4 5 〓 死後 なんちゃって！



## 誘拐犯

犯人からの電話

「一億用意しろ」

「ええ?! 一億なんて……む、無理です」

「できなかったら、子供の命はない。わかったな?」

「うつ あ……お願いが」

「お願い? さては、引き伸ばして逆探知する気だな?」

「違います!」

「切るぞ。30分後にもう一度かける」

「もうかけないで!」

「何だと?」

「うち、子供いません。番号をお確かめの上、もう一度おかけなおしてください」

ガチャッ!

プー  
プー

切られたのは、犯人の方だった。

「……」

## 誘拐犯 2

誘拐した子供に静かに語りかける犯人。

「大人しくしておけば、痛い目にはあわせない」

子供は潤んだ目で頷く。

「今夜、両親に金を用意させる。明日までの辛抱だ」

縄をほどいてやり、パンを渡す。

「これを食べ」

「ありがとう」

だが次の瞬間、子供は突然犯人を頭突きし、その後頭部に一撃を食らわせる。

「うっ！」

「僕、黒帯なんだ」

うずくまっている犯人を置いて、窓から逃走。

「そっいえば……」

誘拐現場は……空手道場の前だった。

## 銀行強盗

白昼、銀行が襲われた。

人質をとって中に立てこもっている犯人に

「無駄な抵抗はやめろ！」

これに銀行の窓から

「るっせー！ このハゲ！」

「な？　すでに貴様は包囲されてるぞ！」

「それがどうした！　ツルピカ！」

「クッ。きっと、貴様の母さんも泣いてるぞ！」

だが何も返ってはこない。

「フン、さすがに堪えたか」

その頭同様に、明るくなつた警部の表情。

やがて、その窓から

「あたしが母親だよ！　文句あつか、ズルムケ！」

主犯格だった。

## 腐れ縁

「貴方と長年一緒に歩んできたけど」

「な、なんだい？ あらたまつて」

「もう、お別れしたいんだ」

「え？ 何でさ？」

「だって、四六時中付きまとってるし」

「そんなこと言っただけ」

「それに色も黒いし」

「そ、それは仕方ない……」

そして 彼女は背を向けて、必死に走り出した。

「はあはあ……で、でも別れられないんだよね」

「今更気づくことじゃ」

そこに通りがかりの親子連れが

「ママ〜！ あの人、影に何か言ってるよ〜！」

## 薄い縁

「ごめん。私、行くわ」

「待ってくれ！ 俺の何がいけなかったんだ？」

「不潔なところ。お風呂入らないし」

「これからは毎日入る」

「きちんとシャンプーもする？」

「もちろん」

「それに、食べ物好き嫌いも多いし」

「なんでも食べるよ」

「嫌いな海藻類も？」

「頑張るよ」

「でも……やっぱり、もう遅い」

「頼む！ 行かないでくれ！」

「さよなら」

洗面台に、一本の細い毛髪が落ちる。

薄らハゲの男、溜息とともに、

「あーあ。また抜けた」

## 名探偵シャルロックⅡホルムズの起

「今から三人の容疑者と卓を囲むよ、後損君」

「そんなんで、犯人わかるん？」

「ああ、この事件は冷静&冷酷なヤツの仕業だからね！」

早速麻雀を開始した名探偵、いちいちコメントを後損君に

「Aは大胆すぎる」

「そか」

「Bはおっちょこちよいだ」

「へえ」

「Cは臆病、甚だしい」

「ふうん。で、犯人誰やねん？」

だが

「え？ ロン？ ま、満貫って！」

「お、おい？」

「う、うるさい！ 黙れ素人めが！」

名探偵、つい麻雀に熱くなっていた。

## 名探偵シャルロックⅡホルムズの承

麻雀もようやく終わり

「で、ホルムズよ。誰が怪しいねん？」

「ク、クソッ、ダンドベとは……え？ 何か言ったか？」

「あのなあ、どいつが犯人やねんって！」

ここで名探偵、首を捻り

「いや、思った以上に賢い犯人だ。尻尾の先うちよすら出さなかった」

「そ、そうかあ……じゃあ今日のところは」

「そう焦りなさんな。私に、少しだけ感ずるところがあるんだ」

「そうか！」

そして彼は、帰途に着く三人に

「もう半荘だけ、お願いだから！」



## 名探偵シャルロックⅡホルムズの転

しぶしぶ、再び席に着く三人。

「後損君。まあ、見ときたまえ」

「推理をか？ はたまた麻雀をか？」

「あ、ホルムズさん。それ当たり！」

「ゴメン、探偵さん。ロンだ！」

「どうせまた熱く……」

そう言いながら、名探偵の顔をチラ見する後損君

「ん？ 案外冷静やん？」

「フフフ。個々では、あの犯罪は到底無理だ。つまり……」

「ここでいきなり立ち上がった彼、三人に向って

「あなた方、三人のなせる業でしょう？」

これに後損君

「おおっ！」

## 名探偵シャルロックⅡホルムズの結

ほんの少しだけ流れた沈黙、やがて

「あのう、探偵さん？ 私、このお二方とは初対面です」

「そそ、俺もこの二人とは面識がない」

「ああ、あたしも。さっき自己紹介されたばかりだし」

「え？」

先に驚いたのは後損君のほうだ。

「ホ、ホルムズ？」

「ハッハッハ」

「ど、どないしたん？」

「フッフッフ」

「おいこら、ちゅうねん！」

「ホッホッホ……すなわち、今回の事件は」

「ん？ ま、まさか、また？」

「自殺か、もしくは事故死だね」

## 伊賀の蘭丸

「フフ、伊賀の蘭丸もこれが見納めだな」

「まだ敗れたわけじゃない！」

「ほう。俺ら根来三人衆に一人で歯向かうか」

この時、蘭丸が少しずつ位置を移動し始めたが

「おっと、貴様を風上に回すわけにはいかん。その？屁こたれの術？で、体が痺れるのは御免なन्दな」

「そ、そこまで知つてるとは」

「では参る！ 根来忍法？火炎砲？！」

三人の口から一斉に火炎が吹き出された！

しかし

「おお？ ひ、火がこっちに！」

「屁に引火させたった」

## 伊賀の蘭丸（後書き）

く、くだらねえ！ す、すみませんw 実は、花ちゃん、青龍に  
続く第三のキャラを思案中なのですが、先のホルムズ氏やこの蘭丸  
では、ちと困難かとw 失礼しました！

## 添い寝

「私ね、こっやって貴方の手を握りながら眠るのが大好き」

「今日ミツチがね……そうそう、ウチにも来たことあるよ。その彼女がね、お弁当を忘れて……ねえ、聞いてる？ うそ？ もう寝た？ つまんない」

「いくら痩せたほうがいいって言ったけどさ、ここまで肉を落とさなくてもよかったのに。まあ、健康にはいいか」

「じゃ、寝るね！ 最近、これ飲まないと眠れないけど」

## 翌朝

「女は昨夜、隣の男の方は死後三ヶ月は経っていますね、警部」

## 機内放送

「何だ？ 今の光？」

「機長、雷にしては……」

続いて衝撃を受け

「ち、地上に確認しろ！」

だが

「つ、通じません！」

やがて、覆っていた煙幕も晴れ

「機長！ こ、これは！」

「何かが衝突した跡……ま、まさか？」

「い、隕石！」

「そのようだ。たまたま空中にいる者だけが助かったのか？」

「そ、そうか」

「だが、どこに着陸すればいいんだ？」

「た、確かに」

「よし、ひとまず乗客を安心させよう」

最初の衝撃で、すでにONになっていた。

## 正直者

僕、自慢じゃないけど、この年まで正直に生きてきました。

今日は街をぶらついて……

「痛っ！」

「こら、どこに目をつけてやがるんだ！」

「ここです！」

僕は明るく答えて、自分の目を

……フルボッコになった。

「た、ただいま」

「ねね、これ母さんには派手かなあ？」

その笑顔に言ってあげた。

「派手！」

……思いっきりしばかれた。

だが僕は

「自分の気持ちに、もっと正直になるぞ！」

そう考え、さきほど買ったスカートに手を伸ばした。



## スフィンクス

「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足。これ何だべ？」

獅子の体と人間の顔を持つ怪物、今日も旅人に質問を投げかけている。

だが、旅人は解答が見つからない。

「ハイ、チーン！ 食っちゃうべ！」

ある時、そこを通った一人の旅人。名はナオミという。

「……で、お嬢さん、これって何だべ？」

日頃より齒に衣を着せぬ彼女、すぐに

「思春期を迎えた男子諸君！」

余りの破廉恥さに、怪物は岩から飛び降り、海に身を投げて死んだという

## プロの舌

「ダメだ、ダメだ!」

オーナーは、食したビーフシチューを脇にやり  
「肉の旨みが出とらん!」

これに左手で頭を掻くシェフ  
「作り直します」

再び現れた皿

「さっきよりはマシだが、印象に残らん!」

今度は右手で顎を撫でるシェフ  
「そうですか」

三度目

「良くはなったが、どこにでもある!」

「では今一度」

足を引きずりながら出て行くシェフ。

四度目

「おおお! こ、これぞ求めていたものだ!」

これに黙ったまま、笑顔で頷くシェフである。

## お見合い

「ママ！ もういいって、お見合いなんか！」

「そう言わずに。貴方だって、もう」

「ええ、ええ、三十五ですが何か？」  
不貞腐れる。

「だったら、騙されたと思って」

「何回も騙されてるじゃん！」  
イライライラ。

「今度こそ、とても良い人だから。今流行の三Kだよ！」

「この年じゃ、そんなの関係ないって」

それに構わず

「まずは格好悪い」

「はあ？」

「次に金がない」

「ええ？」

「で、最後……子連れだし」

きつい、苦しい、かっ  
たるい！

## 記者

別の名を？スクープのナオミ？ 無論、撮る側である。

この新聞社において、彼女の右に出る者はいなかった。

抜群の嗅覚の持ち主とまで称され、社長賞を頂戴してもいた。

半年前のA町の放火

三月前のB町の轢き逃げ

一月前のC町のコンビ二強盗

そして、昨日起きたD町の殺人

今年だけでも、これだけの事件に、いの一番に駆けつけているのだ。

それを雲の上から見ている神様。ポツリと

「いやっ、ここに上がってくるのは到底無理じゃな」

## 七つの子

「ねね、ママ。カラスの歌ってどんなの？」

何でも知りたがりのミツチャン、ママに尋ねている。

「ん？ ああ、七つの子ね！ えっと、カラス何故鳴くの……」  
早速歌いだしたママ。

やがて

「……可愛い七つの子があるからよ……ハイ、おしまい！」

そう言いながら、笑顔を娘に向け

「ミツチャンと一緒に七歳だね！」

だが、何故だか首を傾げているミツチャン

「ふうん。でもね、それって……」

「なあに？」

「子供が七人いるからじゃないの？」

女流探偵 木俣マキ、再び

「クソッ、あのおかつぱめ」

「え？」

船虫警部には、何の事だかわからない。

「いや、こつちの話。で、三人の娘の中にいるって？」

「ええ、父親殺しのです。上から順に、松子・竹子・梅子です」

「犬神家か！」

「はは……で、その父親が、こんな花を握ったまま死んでいて  
ここで警部が写真を取り出し

「松竹梅とは異なる花です」

その黄色の花を一目見た木俣さん

「待宵草かあ……三人の共犯じゃね？」

「え？」

「協調……花言葉だよ！」

## 或る死

「誠に残念ですが……ご臨終です」

それに頷く私

「はい……覚悟はできていました」

「こうなるのは、端から……半年前からわかっていましたが？」

「ええ。確かに、そのとおりです。わかっておりました」

「それなのに、何故？……いや、今は葬儀と埋葬の手配が先ですね」

「はい。そうさせていただきます」

友人たちより送られてきた白い花々、これらに飾られた一人ぼっちのベージュ色の棺。

そして、その中で眠っている

私の儚き恋。



## 旅立ち

小高い丘まで登ってきた二人

「休憩しようね」

そう言った母、歩いてきた方を見下ろしている。

一方の娘、まずは遠くを眺め

「あそこにあるのは？」

「教会よ。あそこから出発したんだ」

「ふうん」

一本道を、さらに手前側へと辿っている二つの目  
「あんな桜ってあった？」

「ちゃんと今でも咲いてるじゃない？」

だが、そこから手前は暗くて見えない。

「さ、行こうか？」

目の前の、雲まで伸びている階段に目をやっている母

「……桜ちゃん」

## 生きる

「恋って素敵ね！」

「それは貴女が素直だから、そう感じるんだよ」

「愛って哀しいね！」

「それは貴女が大人になったから、そう思っただ」

「生きるって大変だね！」

「それは貴女が人を好きになったから、そう重荷になってるんだ」

「死って美しいね！」

「それは貴女が生きるのを諦めたから、そう見えるだけ。周りには、そうは映らないよ」

「そうかなあ？」

「だからやめときなさい……どうせ、自分の死んだ姿なんて見れないんだから」

綺麗になった？

「最近、綺麗になったネ！」

よく言われるんだな、これ。  
確かにニキビは減ったかも？

「とってもスベスベじゃん！」

これも言われるなあ。

あなた方みたいにゴチャゴチャはしてないかも。あ、私から見ればよー！

「ゆで卵みたい！」

やだあ、そこまでテカテカじゃないよ！

そう言えばあなた方って、右目も左目も口も鼻も、みんな適当に配置されてるね！ あ、言い過ぎた？

で、おもむろに鏡を

「ホント、我ながら惚れ惚れするのっぺらぼっだー！」

## 人間ドック

「では、両足とも伸ばして。で、体は横にむけて、そうそう!」

「次は両手をそれぞれの耳につけて、大きく上へ伸ばして。あ、やれば、できるじゃん!」

「では、この赤色と黄色の両方とも、体に塗りますね!」

「では、大きく息を吸って……ハイ、止めて!」

そこで機器が、その人物を上下から挟み込んだ      ジュッ

「ハアーイ、OKです! お疲れでした!」

この時、彼女の目には看板が入り

「んもう! また、クの点々が取れてるじゃん!」

ボロツトくん

「おい、ボロツト!」

「オッサン、何でんねん? 気持ちよう寝てるちゅうのに」

「おまえ、何故に造られたかわかっているのか?」

「んなもん知らんわ」

「この馬鹿たれめ! 人類を滅亡させ、世界を征服する為だろが!」

「ちょっと待ったとき、ピピピのピやわ! x ㄣ (世界制服)

(x) わいの天下(x) (人類滅亡(x) 世界制服(x)ㄣ 人類滅亡(x) わいの天下(x)」

そして

「ほな、まずはオッサンにロケットパンチや!」

## 夢のない人

「ここ掘れわんわんつと!」

これに爺さん

「ぼち、ここに何が埋まつてるんや?」

「お宝です」

「お宝? そらぐつつうおおきにや!」

掘りまくる貧欲な爺、やがて

「こら何だんねん?」

「地図です。あぶり出しですね」

「ふうん。ほな」  
だが

「え、えらいこつちゃ! 灰になつてもうた!」

ここで愛犬がニコツと

「それを撒いたら桜の花が咲き、心も豊かになり……これがお宝でなくて、何でしょう?」

これに

「灰以外の何もんでもないやんけ！」

私、人を殺した……

「おたくね、いきなりそう言われても」  
困惑しているおまわりさん

「それで誰を？」

「いえ、名前までは」

「は？ 冗談なら帰ってくれませんか？ こっちは忙しいんですから」

「本当なんです」

「どうせ、夢かなんかでしょ？ さ、帰った帰った！」

「嘘じゃないです」

「おたくOLでしょ？ 早く仕事に戻って！」

「あ、でも場所は」

「ん？ じゃあ、どこですか？」

「ここです！ ここで……」  
そして澄ましたまま

「人を殺したいんです。私、いますぐ」



## 息子と母

「幸一くん！ 今日、学校は？」

「あ、ママ」

しかし息子はうつむき

「ボク、行きたくないんだ」

これに目を白黒させている母親

「い、行きたくないって？ だ、駄目じゃないの！」

「で、でも勉強が難しくて、ボクついていけないんだ」

息子のこの言葉に、今度は優しく

「でもさ、幸一くん。六年間も頑張ってきたんじゃない、ね？ 卒業までもう少しなんだから……ファイト！」

それに相手がポツリと

「やっぱり、四年で就職すればよかった……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3421k/>

---

?二百文字?も積もれば塵となる

2011年1月24日20時31分発行